

国指定史蹟 達谷窟毘沙門堂境内

- 真鏡山
- 毘沙門堂
- 岩面大佛
- 奉行坊杉
- 蝦蟇ヶ池
- 多之鳥居
- 辯天堂
- 礼堂
- 至敵美溪

四 不動堂
御不動様は西年守本尊で厄除の不動様。剣を奉納するとよい。火伏・眼病の神様。また生涯一度の大願が叶うとされる。柏手を打って祈るもよし。「ナマサマムダバサラナンセムダマカロシヤナソハタヤウムタラタカムマン」と御眞言を唱えるもよし。

五 金堂
御薬師様は御神木の松で刻まれた松薬師。名の通り惱める衆生を待つ御薬師様である。身體堅固・當病平癒・延命長壽の他、諸々の願いが成就する。「ランゴコロセムダリマトウギソハカ」と御眞言を唱えて祈るとよし。

記念スタンプをどうぞ

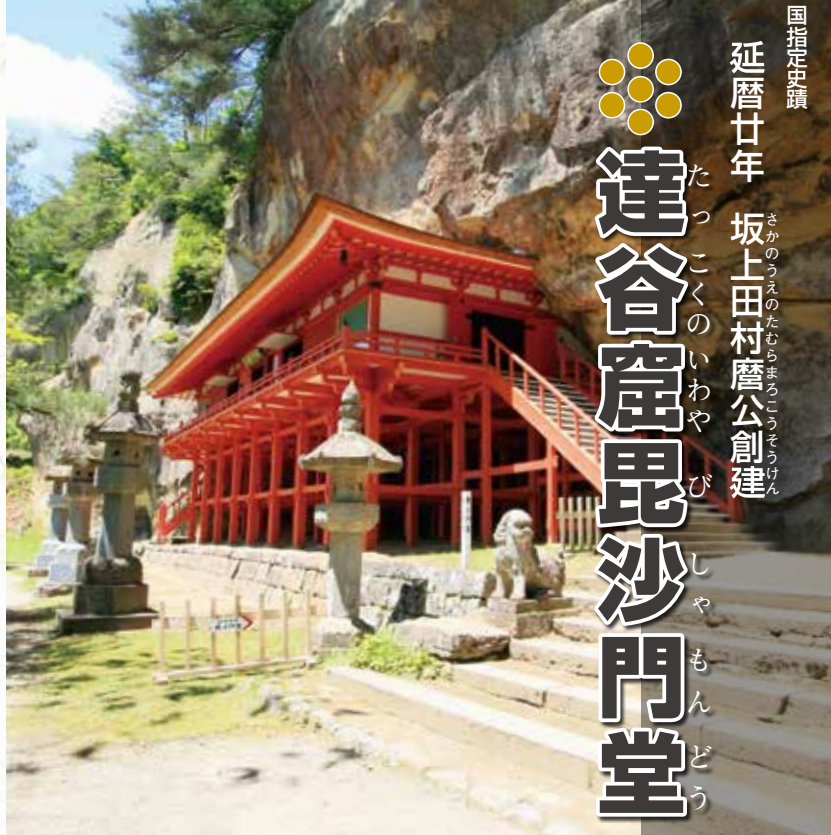
◆ **主な行事** ◆

正月一日〜八日 修正會
毎日三座 修毘沙門天王供
元旦 仁王會 禮拜講
二日 鬼離會
三日 初夜座 後夜座
八日 牛玉法
毎月一日 毘沙門天王護摩供
毎月三日 月例祭
正月十四日夜 奈焚祭(どんと祭)
正月第一日曜日 節分會
二月十一日 紀元節
二月十五日 涅槃會
二月廿三日 天長節
旧三月三日 春季大祭
旧四月八日 白山會(夜神樂祭)
旧五月廿三日 大將軍會
旧八月三日 開山會
旧九月三日 秋季大祭
十二月二日 毘沙門様御年越祭
十二月八日 成道會
十二月十七日 觀音様御年越祭
十二月廿日 辯天様御年越祭
十二月廿七日 御不動様御年越祭
十二月三十一日 毘沙門天王護摩供

達谷窟と「田村信仰」
坂上田村麿大將軍東征の靈蹟である達谷窟に関する最古の記録は「吾妻鏡」文治五年(一一八九)九月廿八日の条であり、それ以降「諏訪大明神繪詞」や「田村草子」「鹿嶋合戦」等の中世文學の他、日本國中の社寺縁起にこの窟の名が見え、「公卿補任」に「毘沙門天ノ化身來タリテ我國ヲ護ル」と記される様に、大將軍の本地を毘沙門天と見做す「田村信仰」の發祥地として、國の史蹟に指定されて居ります。達谷窟毘沙門堂の御本尊様は、御堂内陣中央の扉の奥に祀られる慈覺大師が大將軍の御影を模して刻まれたと傳える秘佛であり、御堂床下の廣い空間は、昔から諸國行脚の遊行の聖や山伏、乞食等の休める安任の宿として、また合戦に敗れたもの、ふが暫し身を隠し、しかる後生まれ替わって行く再生の場として、さらには祖先の靈魂がああ音から還りて集う聖なる処として、現在も人の立入る事を許さぬ禁足地とされており、その信仰は「窟の毘沙門様を拜めば災に遇う事無く、毘沙門様に引掛せられて極楽に往生す」と云われる程、隆盛を窮めました。三つの鳥居を潜って、達谷窟毘沙門堂及び別當達谷西光寺に座す諸佛諸神に御参りすれば、大將軍の創建以來、今も變わらぬ「田村信仰」の靈場の佇いを、きつと懐かしく感じられる事でしょう。

「南無田村大將軍」
令和二年 壬寅 季春

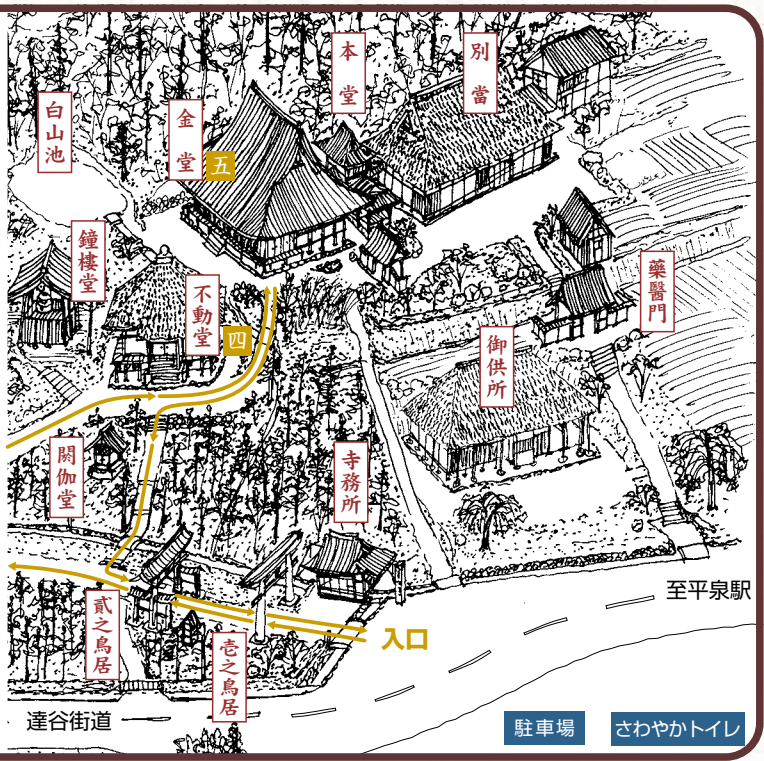
たつこくせいこうじ
達谷西光寺
〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字北澤16番地
TEL 0191(46)4931 FAX 0191(34)9911
TEL・法話 0191(46)5037
ホームページ <http://www.iwayabetto.com/>
◎許可なく境内諸堂諸佛及び縁起等の掲載を禁ずる



延暦廿年 坂上田村麿公創建
たつこくのいわやび
達谷窟毘沙門堂
しゃもんどう

征夷大將軍坂上田村麿公の創建を傳える達谷窟毘沙門堂の境内は御神域として古くから殺生禁斷地とされ 動植物の採取や烟草 飲食等の行爲 犬猫を供つての参詣は堅く禁じられて居ります 拜觀は参拜の順路に従い 案内書を御覧の上参拜なされます様御勧め申し上げます

別當 達谷西光寺



一 毘沙門堂
毘沙門様は寅年守本尊。悪鬼を降し福を招く、財寶・官位・智慧・壽命の他に縁結・子寶・學業成就。また軍神の故勝負事等の必勝祈願、諸々の願が叶うと云われる。昔より繪馬を奉納するとよいとされる。柏手を打って祈るもよし。合掌して「ランベイシラマナヤソハカ」と御眞言を唱えるもよし。

二 岩面大佛
大佛様は極樂の佛様。萬靈供養の爲、合掌して「南無阿彌陀佛」の名號を唱えるとよし。

三 辯天堂
辯天様は巳年守本尊。技藝・福德・智慧の神。「辯天には錢上げて拜め」といわれる金運商売の神である。仲良き男女は共に参らぬ事。惱氣な天女の前で縁結を願うと逆に縁切になる。柏手を打って祈るもよし。「ランウガヤジャベルベイソハカ」と御眞言を唱えるもよし。

達谷窟毘沙門堂縁起

約そ千二百年の昔、悪路王・赤頭・高丸等の蝦夷がこの窟に塞を構え、良民を苦しめ女子供を掠める等乱暴な振舞が多々、國府もこれを抑える事が出来なくなつた。そこで人皇五十代桓武天皇は、坂上田村麿公を征夷大將軍に命じ、蝦夷征伐の勅を下された。對する悪路王等は達谷窟より三千餘の賊徒を率い、駿河國清美關まで進んだが、大將軍が京を發するの報を聞くと、武威を恐れ窟に引き返し守を固めた。延暦廿年（八〇一年）大將軍は窟に籠る蝦夷を激戦の末打ち破り、悪路王・赤頭・高丸の首を刎ね、遂に蝦夷を平定した。大將軍は、戦勝は毘沙門天の御加護と感じ、その御禮に京の清水の舞台を模して九間四面の精舎を建て、百八鉢の毘沙門天を祀り、國を鎮める祈願所とし窟毘沙門堂（別名を窟堂）と名付けた。翌延暦廿一年（八〇二年）には別當寺として達谷西光寺を創建し、奥眞上人を開基として東西 卅 餘里、南北 廿餘里の廣大な寺領を定めた。

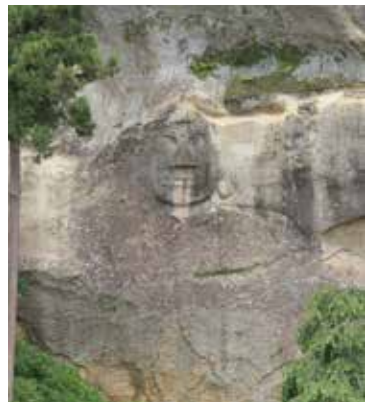


降つて前九年後三年の役の折には源頼義公・義家公が戦勝祈願の爲寺領を寄進。奥劔藤原氏初代清衡公・二代基衡公は七堂伽藍を建立したと傳えられる。文治五年（一一八九年）源頼朝公が奥劔合戦の歸路、毘沙門堂に參詣され、その模様が「吾妻鏡」に記されている。中世には七郡の太守葛西家の尊崇厚く、延徳二年（一四九〇年）の大火で焼失するが、直ちに再建。戰國時代には東山の長坂家より別當が赴き、多くの衆徒を擁したが、天正の兵火に罹り、岩に護られた毘沙門堂を除き、塔堂樓門悉く焼失した。慶長廿年（一六一五年）伊達政宗公により毘沙門堂は建て直され、爾來伊達家の祈願寺として寺領を寄進されてきた。

昭和廿一年隣家から出火。御本尊以下 廿數鉢を救出したが毘沙門堂は全焼。昭和三十六年に再建された現堂は創建以來五代目となる。内陣の奥に慶長廿年伊達家寄進の厨子を安置し、慈覺大師作と傳える御本尊・吉祥天・善賦子童子を秘佛として納める。次の御開張は令和 廿 四年となる。毎月三日の月例祭・春秋の大祭を始め、多くの神事を執行。特に正月元旦から八日迄行われる修正會は、慈覺大師から惠海大和尚が傳え、千餘年も続く神事である。

岩面大佛

窟毘沙門堂西方の大磨崖佛は、約そ十丈（約三十三m）にも及ぶ大岩壁に刻まれている。前九年後三年の役で亡くなつた敵味方の諸靈を供養する爲に陸奥守源義家公が馬上より弓張を以つて彫り付けたと傳えられている。この大佛は高さ五十五尺（約十六・五m）、顔の長さ十二尺（約三・六m）肩幅



三十三尺（約九・九m）全國で五指に入る大像で、「北限の磨崖佛」として名高い。元祿九年（一六九六年）の記録に「大日之尊體（岩大日）その後岩大佛と記され、現在は岩面大佛と呼ばれている。猶、尊名は岩大日の記録から大日如来とする考えもあるが、拙寺では昔から阿彌陀佛の名號を唱えており、戦死者追善の傳説からも阿彌陀如来とするのが正しいと思われる。その証左として岩面大仏の下に立つ「文保の古碑」（一三二七年）には阿彌陀の種子である「悉」が刻まれている。明治廿九年に胸から下が地震により崩落し、現在も磨滅が進んでおり早急な保護が叫ばれている。

蝦蟆ヶ池辯天堂

昔 満面の水を湛えていた達谷川や北上川を美しい浮嶋が行き來するのを、奥劔巡錫の慈覺大師は、五色の蝦蟆の姿で、貧乏を齎す貪欲神が化けていると見破つた。大師は嶋を捕えて窟毘沙門堂の前まで引き、再び逃げ出さぬように一間四面の堂宇を建立し、蝦蟆を降伏する白蛇、即ち宇賀神王を冠に頂く八肘の辯才天女を自ら刻して祀り、蝦蟆ヶ池辯天堂と名付けたと傳えられる。昭和六十年の調査で蝦蟆ヶ池舊護岸から平安末期の土器が大量に發掘されている。現堂は、昭和廿一年の大火で焼失し、昭和四十六年再建の堂が狭小で、神事の執行に甚だ不便であつたため、平成 廿五年癸巳の歳に、元祿再建時の舊規に倣い、脇士の十五童子の内九鉢と共に、御修覆なつたものである。辯天様は金運商売の神で、古くから商家の信仰が厚い。また「生けるが如し」と賞される美しい御姿は美人の譬とされたが、流石に祟を恐れて誰も御貌を覗き見る事はできなかつたという。格氣な天女の故、仲良き男女は共に詣らぬ習いがある。蝦蟆ヶ池は神の池で、ここに棲む生きとし生けるものは、古來から辯天様の御使であり、特にも蛇はその最も尊いものとされている。



姫待不動堂

悪路王等は京から攫つて來た姫君を窟上流の「籠姫」に閉ぢ込め、「櫻野」で暫々花見を楽しんだ。逃げようとする姫君を待ち伏せした瀧を人々は「姫待瀧」。再び逃げ出せぬよう姫君の黒髪を見せしめに切り、その髪を掛けた石を「髻石」と呼んだ。姫待不動尊は智証大師が達谷西光寺の飛地境内である姫待瀧の本尊として祀つたものを、藤原基衡公が再建した。しかし年月を経て堂宇の腐朽が著しい爲、寛政元年（一七八九年）當地に移された。桂材の一木彫で、全國でも希なる大師様不動の大像である。製作年代は平安後期で、岩手県有形文化財に指定されている。



金堂

古くは講堂とも呼ばれ、延暦廿一年（八〇二年）に達谷川對岸の谷地田に建てられたが延徳二年（一四九〇年）の大火で焼失した。江戸時代には現在地に建てられた客殿が金堂の役割を果たしていたが、明治初年に排佛毀釋で破壊された。昭和六十二年に再建に着手し、平成八年に完成した。桁行五間梁間六間の大堂で、後舌に技を傳える爲、昔ながらの工法を用いて作られた。本尊は眞鏡山上の御神木の松で刻まれた四尺（約一二〇cm）の薬師如来である。

